

## 書 評

### 松倉公憲 著『地形学』

朝倉書店 2021年 308p. 6,300円(税別)

本書は、地形を本気で学びたい人のための教科書である。著者はまえがきで「大学の地理学科・地球科学系学科の2・3年生以上の『地形学』に関係した講義における基礎的・標準的な教科書・参考書をめざし、地形学を初めて学ぼうという方を想定して…」と前置きしているが、そういうレベルの本ではない。しかし、ただ難しい本というわけでもない。地形学とはどんな学問であるのか、何が分かるのか、何を見ているのか、そしてどんな社会的貢献ができるのかに至るまで、ていねいに省略なく記載されている。より深く地形を見る目を養いたい人、地形学や関連する研究分野の研究者を目指す人に、できるだけ早く精読して欲しい、良質の教科書である。

はじめに、著者と本書の位置付けについて簡単に紹介しておきたい。著者の松倉先生は筑波大学の地形学分野を長い間牽引されてきた研究者で、特に地形形成プロセス研究の第一人者である。2010年に定年退職された後、10年の時をかけて本書は書かれた。私は研究仲間から松倉先生が教科書執筆に取り組んでいると聞いていたので、その出版を心待ちにしていた。地形プロセス学(プロセス地形学とも)をベースにした地形学の教科書は、洋書には優れたものがそれなりの数あるが、日本では訳本以外に見当たらないという現状にあった。そこに登場したのが本書である。私もこの分野の勉強は英語の教科書や論文と格闘するところから始めた経験から、本書を一読した時の最初の感想は、「パークレー(での在外研究)に行く前に読みたかったなあ」だった。

それでは、簡単に本書の概要を紹介していこう。本書は12章から成るが、内容的には大きく3部に分かれている。

第一部(第1章)は「地形学へのアプローチ」

で、上にも書いた地形学とはどのような学問かについての記述から始まる。地形は、地形形成に関わるいろいろな事(地形プロセス)の結果だというのは素人でも分かるが、それを分解して論理的に整理するとなると途端に難しくなる。この章では、それを具体的な例を示しながら地形の見方・考え方を説明する。洋書の類書、著者のこれまでの研究成果、著者が長く中心となって貢献してきた地形学連合のフィロソフィー、そして日本で一般的な発達史地形学的視点が上手に組み合わせられて構成されている。私は読了後、頭の中の知識が、今まではとは少し異なる形で整頓されたような感覚を覚えた。ただ、地形学を初めて学ぶ人には聞き慣れないであろう言葉が多く、詳細は後ろの章を参照という書き方なので、本当に初めて地形学を学ぼうとする人は、とりあえず一回通読し、後から何回か戻って読み直す必要はあるかと思う。

第二部(第2章・第3章)は内的営力に関する章で、変動地形と火山地形について書かれている。地球の層構造、プレートテクトニクス、造山帯と安定陸塊、褶曲、火山噴出物など、地形を理解する上での基本的なポイントが、地形プロセス学の視点から説明される。すでにある程度地形学を勉強してきた人にとっては、どれも分かっているつもりになっている所、知識としては知っている話なのだが、私にとっては「そういう見方もあったか」と感じる箇所が随所あって面白かった。

残りの第三部(第4章～第12章)は外的営力に関する章が並ぶ。具体的には、風化、カルスト地形、斜面地形、河川プロセス、河川地形、海岸地形、乾燥地形、氷河地形、周氷河地形である。こうして並べてみるとよく分かるが、外的営力によって作られる地形は扱う時間スケール・空間ス

ケールともに地形プロセス学が得意とする分野である。したがって著者や著者の研究グループの研究成果も所々に紹介されている。本書の良い所の一つは、英語のProcess Geomorphologyの教科書に掲載されている理論や説明と、著者らの研究グループのこれまでの研究成果が、良いバランスで掲載されている点である。これにより、海外の教科書と対比しながらの勉強もしやすくなるし、日本での事例も考えやすくなる。これからの人は、日本の事例も記載されたこの教科書を使って地形(プロセス)学を学べると思うとちょっと羨ましい気がする。

次に、全体を通しての本書の特徴を三点あげておきたい。

一点目は、本書では全体にわたって貝塚爽平先生らの「発達史地形学・地形発達史」的な研究成果や地形観を取り込み、地形プロセス学と融合させようとしている印象を強く受けた。その意図も込めて、本書のタイトルは「地形プロセス学」ではなく『地形学』なのであろう。これにより地球科学(実験・計測)的な視点で地形に興味を持つ人だけでなく、景観が目浮かぶような地形学を好む地理的センスの人(本学の地理学科の学生のような)にも興味を持ってもらえる書き方になっており、この試みはある程度成功していると思う。

二点目は、本書にはたくさんコラムが挿入されているが、これらが面白い。地形学を勉強して

いると必ず気になる所や引っかかるテーマが上手にピックアップされている。その中には、本書の出版直前に発生した「2021年7月に熱海市で発生した土石流」に関する記述まである。一度通読したら、今度はコラムだけを順々に読んでいくという読み方もありだろう。

三点目は、本書は高校の地理や地学に掲載されている地形に関する内容との接続を意識した構成になっている。例えば、数年前に話題となった造山帯、褶曲山地といった誤解しやすい言葉などについて、大学以降の研究分野での定義や使われ方がわかりやすく書かれている。したがって中学・高校で教鞭を執っている特に地理の先生方にも読んでほしい、参考にしてほしい本である。

最後に、繰り返しになるが本書は多くの人(特に学部生)にとって簡単に読み通せる本ではない。しかし今の日本の地形学に必要な教科書であることは明らかであるし、今、私がこの本を手にすることができたのは(少し遅いが)幸せなことなのだと思う。この本は読んでいるだけではダメで、野外での調査経験を積み重ねながら読まないで理解できない内容を多く含んでいる。だから私は、この本を学生と一緒に読みながら自分の研究を進めていきたいと思った。

本書は、今後長く参照され続けるであろう、読み応えのある一冊である。関連する多くの人に読んでほしい。

(田中 靖：駒澤大学)